

土間通りでまちの軸を引き込み，軒下に滞留を呼び込む地域共生文化拠点 春日台センターセンター

THE EARTHEN FLOOR DRAWS IN THE AXIS OF THE TOWN,
AND THE EAVES CREATE A PLACE FOR PEOPLE TO HANG OUT
; REGIONAL SYMBIOSIS CULTURAL CENTRE
KASUGADAI CENTER CENTER

○山腰 真也^{*1}，米ヶ田 里奈^{*2}，山田 あすか^{*3}
YAMAKOSHI Masaya, MEKATA Rina, and YAMADA Asuka

This complex facility was built on the site of a long-time beloved supermarket. The site includes a group home, a small-scale multifunctional in-home care facility, a shared office, and a temple school. The laundromat in the facility serves as a link between the community and welfare through the activity of "laundry" in daily life, and some of the laundry services are operated by the employment support business. The center is a place where everyone can interact and participate in the development of the town while supporting each other.

Keywords : Symbiotic Type, Community Comprehensive Care, Community based, Multigenerational exchange,

共生型，地域包括ケア，地域密着，多世代交流

1. 施設概要（写真1）

所在地：〒243-0302 神奈川県愛甲郡愛川町春日台3
丁目6-38（図1）

施設種別：機能複合型の福祉施設（認知症高齢者グループホーム，小規模多機能型居宅介護，放課後等デイサービス，就労継続支援AおよびB型事業所，コインランドリー，コロッケスタンド，寺子屋，コモンズルーム＋貸室）

運営主体：社会福祉法人 愛川舜寿会

設計管理：金野千恵・泊絢香・照井飛翔^{*}・村部壘^{*}／tecoco（^{*}は元所員）¹⁾

建物構成：地上2階

構造規模：木造

敷地面積：1508.41 m²

建築面積：819.89 m²

延床面積：1130.62 m²

利用者定員：認知症高齢者グループホーム（定員9人 / 1ユニット×2），小規模多機能型居宅介護施設（登録25名，通い15名，宿泊8名），放課後等デイサービス（定員10名），就労継続支援A型（10名）＋B型（10名）

運営開始：2022年3月



写真1 外観写真

^{*}1 東京電機大学大学院 未来科学研究科 建築学専攻 修士課程

^{*}2 東京電機大学大学院 先端科学技術研究科
建築・建設環境工学専攻 博士課程

／東京電機大学 総合研究所 特任助手・修士（工学）

^{*}3 東京電機大学 未来科学部 建築学科 教授・博士（工学）

^{*}1 Graduate Stud., Architecture and Building Engineering, Graduate School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ.

^{*}2 PhD Stud., Graduate School of Advanced Science and Technology, Architectural, Civil and Environmental Engineering, / Project Research Assistant, Research Institute for Sci. and Tech., Tokyo Denki Univ.

^{*}3 Professor, Dept. of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

2. 開設経緯

2.1 開設の背景

1992年に設立された愛川舜寿会は、2000年から神奈川県愛甲郡愛川町にて、特別養護老人ホーム「ミノワホーム」を運営してきた。法人の常務理事・馬場拓也氏は、「ケアを専門職にせず、社会の側を優しくしていく働きをしたい」と話し、「地域の人々と、ケアを起点としたコミュニティを再構築し、社会をヒラキ”やさしく”する」といったビジョンを掲げている。そうした考えの基、2016年には、ミノワホームと公道の間にあった、約80m、高さ1m超の擁壁を壊し、庭先でお茶をする利用者がまちの動線と交わるように、「特養一社会」間の物理的・精神的な壁を壊し、庭をつくり地域開放した（写真2、写真3）。これは、地域に住まう認知症の高齢者や障がいをもつ住民らが、当然まちにいる状況、すなわち”地域の当たり前”をつくるといったコンセプトが可視化された、最初のプロジェクトである。

2.2 開設の経緯

春日台センターは、1969年（昭和44年）に開業して以来、春日台地区の人たちに長く愛され、まちの中心を担っていたスーパーマーケット「春日台センター」の閉店後5年目に、その跡地にて設立された。2015年12月、馬場拓也氏は初めて敷地を訪れた際に、商店街のスーパー「春日台センター」の閉店の危機に立ち会ったのをきっかけに、計画の枠組みをリセットしようと考えた。そこで馬場拓也氏は、一級建築士事務所 teco(東京都台東区)を主宰する建築家の金野千恵氏と共に、愛川町でどう暮らすかを考える活動団体「あいかわ暮らすラボ」（通称「あいラボ」）を立上げた（2017年）。

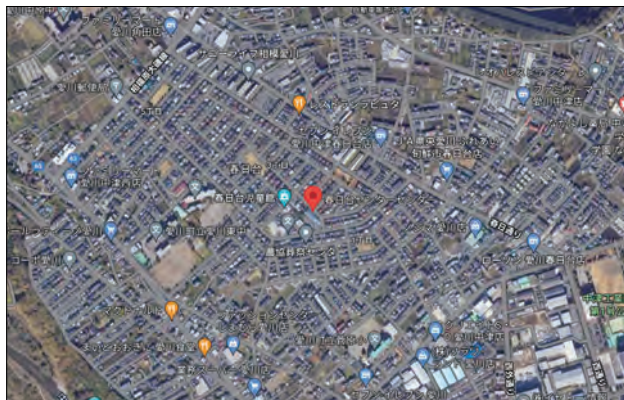


図1. 立地周辺（google map より＊）

小田急小田原線、相模鉄道本線「海老名駅」から神奈川中央交通バス【海01、海02】にて「春日台一丁目」バス停下車徒歩5分の位置にある。敷地内には児童館・春日台会館・商店会駐車場もある。

この「あいラボ」で、地域課題意識の高い住民らの話に耳を傾け、課題認識や魅力への気づきとその共有や、ディスカッションの連続によって、ここでどのように暮らすかを考えるきっかけを見出した。

その後、馬場拓也氏は、「あいラボ」の活動として自治会館等でのワークショップを続けながら、土地の借地権の獲得（2018年）、町の福祉事業として採択（2019年）、建築の竣工（2022年）、と約6年間、計画を進めてきた。WS「あいラボ」を含む枠組づくりの検討から、上記7つのサービス・機能を中心に、地域で「はたらく人」、「住まう人」、「日常の居場所とする人」が集う事業を構築した。それから約5年経った2022年（令和4年）、「春日台センターセンター」の運用を開始し、みんなが暮らし慣れたこの場所で、年齢や国籍や障害のあるなしによらず、地域のすべての人たちとともにある、まちの新しい拠点を目指し運営されている。

3. 建築のコンセプト

「春日台センター」と隣接した商店街は、馬場拓也氏



写真2. 共生の技術（ミノワホーム）

地域との共生における距離感の調整を、煉瓦の透かし積みのフルオープンではない壁によって、達成している。もともとあった壁を職員自らの手で「壊す」ところから改修をはじめたことは象徴的かつ印象的な出来事として共有される体験である。



写真3. 底下の活用例（ミノワホーム）

テーブルと椅子が置かれ、入居者らのお茶のみや訪問してきた家族との滞留の場になっている。

が少年時代に毎日遊んだ場所である。再び、地域住民の集まるプラットフォームをつくるため、馬場氏は建築空間を重視していた。先述の金野千恵氏と話し合い、福祉施設という枠にとらわれず、地域に溶け込み人々が自然に居心地よく過ごすことができる場所を、2階建ての木造建築でつくった。シンボルでもある、大きくせり出した1枚の底は「同じ屋根の下、地域 みんなが寄り添って過ごす場所になれるよう」(金野氏)との思いが込められている¹⁾。実際、地域の子どもから高齢者、障害者など多世代で利用し、GHや小多機、放課後等デイなどの福祉施設でありながら、広場には学校帰りの子どもたちであふれている。視察中には、カミヤト凸凹保育園の卒園生が遊びに来ている姿が見られた。

また、施設利用に係る明確なルール設定や禁止事項を設けず、利用者が自ら考える主体的な空間利用を促す工夫をしている。具体的には、禁止事項を書いた張り紙や指示書は設置せず、困り事や不明点を誰かに聞くべき状況を作り出すことで、運営者を含む利用者同士の対話での解決を促し、交流のフックになるような仕組みづくりを行っている。よって施設全体は利用者によって大らかに使い込まれている。また外部空間との境界を曖昧(グラデーション)に設えることで、地域住民が当たり前ここに居られる、敷居の低い、みんなが馴染める場所を目指している。

4. 施設・建物について

■全体の構成(図2,図3) 様々なサービスが詰まった建物でありながら、コンパクトな作りになっている。商店街のメインプロムナードに木造架構の底を伸ばし、カウンターやベンチ、小上がりなど開かれた居場所が連続する(写真4)。この特徴的な大きな底の下は、利用者と地域住民の交流スペースとなっている(写真5)。南側のプロムナードから住宅地へと続く敷地の奥行き方向に室の開放度合いが徐々に変化し、静かな個室群が並ぶ(写真6)。また、周辺環境との境界をあいまいにすることで、壁のない開放感と全体の大らかさを感じる空間となっている。

■洗濯文化研究所 家事の中で、外注がしにくく負担が重い「洗濯」から住民を解放したいという思いから、家庭の中の家事負担の軽減を就労支援によって実現できないかと考え、バルコランドリープレイス^{注1)}と協働し、開設に至った。障害者就労継続支援A型として、その利用者らが清掃や洗濯代行の衣類を畳むといっ

た業務を行う。洗濯・乾燥・畳みまで行う「洗濯代行サービス」で、多様化する地域の家庭を支える仕事を担っている。外にオープンな造りになっており、待合スペースは地元のFMラジオ局の公開収録の場として使われることもある(写真7,写真8,写真9,写真10)。



写真4. 商店街に続くプロムナード

春日台センターセンターから商店街をみる。底下から商店街にそのまま行くことができる。商店街には郵便局などがある。



写真5. 底下の活用例

夏には子供たちのプールが置かれ、思い思いに子供が遊ぶ。



写真6. プロムナードから住宅街に通る道

メインプロムナードの反対側には閑静な住宅街が広がっている。周辺住宅と境界があいまいで、施設利用者以外の方も施設であるとは気づかずに通るほど。

■春日台コロッケ

就労支援B型の事業所として、揚げたてのコロッケの販売をする。後述のカミヤト凸凹文化教室（放課後等デイサービス）の卒業生が就労実習として働いている。このように、放課後等デイから就労までをワンストップで支え、人と交流し合いながら社会経験を積むための受け皿となっている。カミヤト凸凹保育園（同法人運営の保育園で厚木市上依知にある）の卒園生が遊びに来ることもある（写真11、写真12、写真13）。

■寺子屋・コモンズルーム レンタルスペースとしてKUMONやプログラマー、イラストレーターなどの個人事業主に貸出し、運用している。寺子屋は就労支援B型の作業場や、大きなスペースを確保できるため、会議や視察対応にも利用可能である。中学生が勉強している姿もあった。

■小規模多機能型居宅介護 デイサービス、訪問介護、宿泊を行っている。玄関口がないのが特徴で、通り抜けできる土間通りを通して、生活風景や音が外に伝わってくる。洗濯物を持った人がグループホームに行くなど、多様な人の行き交いを生み出している。また、日中の利用者はダイニングスペースで主に生活しており、その間の空いたスペースを有効活用するため、誰でも使えるオープンスペースとして解放している（写真14、

写真15、写真16）。夕方、子どもたちはここに自然と集まり、勉強したり、駄菓子を買ったりと、楽しむ場に



写真7. 南側プロムナード

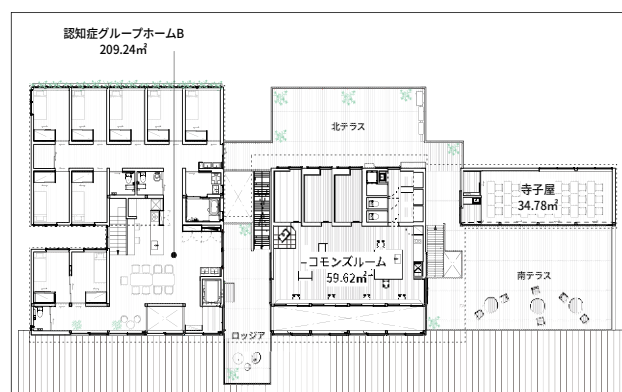


図2 春日台センターセンター2階平面図²⁾

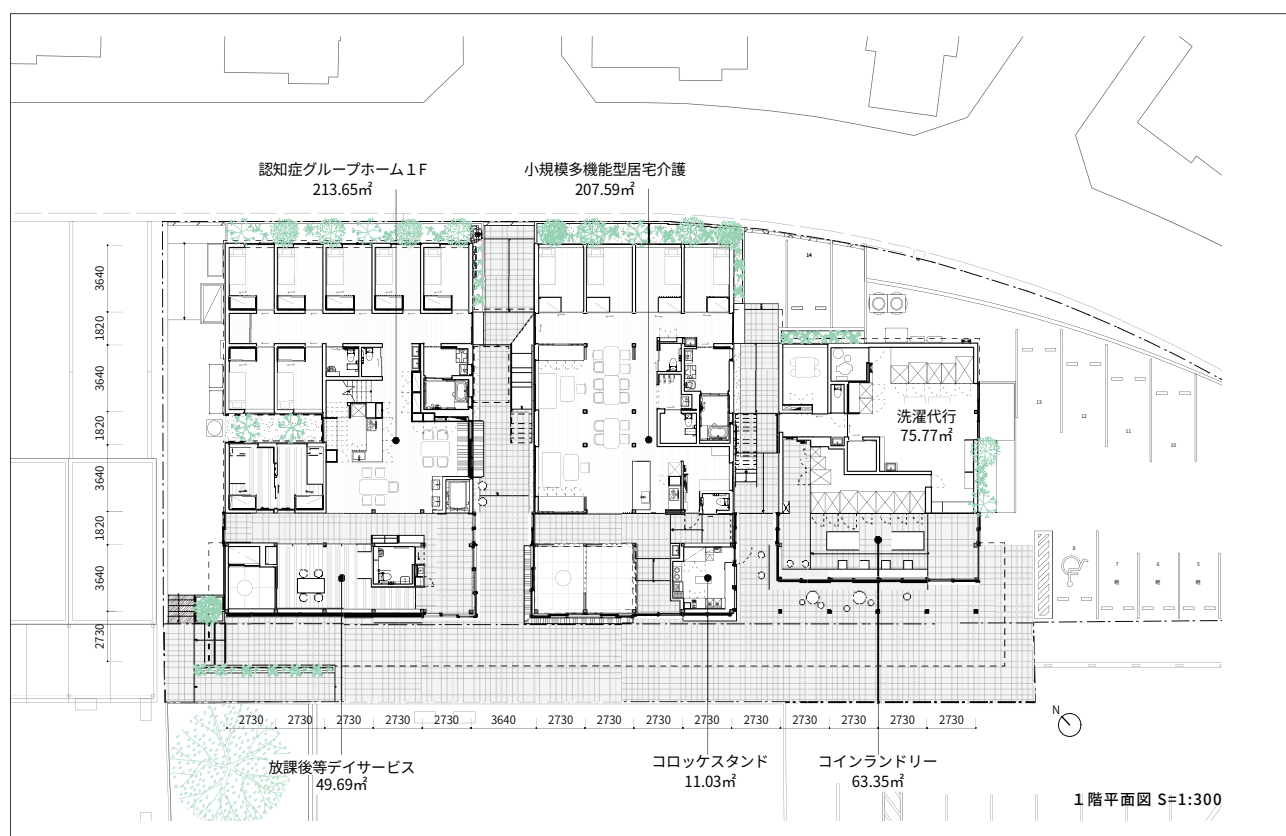


図3 春日台センターセンター1階平面図兼配置図²⁾

なっている。また、幼稚園帰りの親子が休憩に使う場所としても地域になじんでいる。

■認知症高齢者グループホーム・放課後等デイサービス 認知症高齢者グループホームと放課後等デイサービス（カスガダイ凸凹文化教室）は併設し、多世代共生型で運用している。カスガダイ凸凹文化教室は9割が小学生で、介護サービスの利用者との交流があ



写真8. 開かれた居場所

カウンターやベンチ、小上がりなどが開かれた居場所としておかれている。隣にあるコロケスタンドのイートインスペースとしても活用されている。



写真9・10. 洗濯文化研究所内観

就労支援事業利用者が働きやすいよう、洗剤に記号を付けたり、分量を書いた紙を張るなど、細かい工夫がなされている。コインランドリー側は大き目の机を配置し、地方ラジオの収録場所としても使用されるなど特徴的な利用も見られた。

る。子供たちが騒がしすぎる際には、グループホームの利用者が注意するなど、共生型サービスならではの自然な関係性が構築されている（写真17）。

■土間通り（写真18） 以上の7つの機能を3つの棟に分棟し、建物の長手・短手方向に土間空間として通り抜ける道が貫通している。これにより、建築の機能、町民の活動、商店街や公園などの町の風景、堆肥の匂いを含む自然環境など、豊かな関係が交わり、周辺地域と繋がっている。都市レベルでみると、春日台センターセンターはまちの軸が通っている重要な場所であり、土間通りによって建物に引き込むことを達成している。

5. まとめ

「ミノワホーム」によって、地域に明確なビジョンを示したプロジェクトを背景に、年代や特性に依らずみんなが集まれる場所づくりによって、あるべき地域の姿を体現している。

建築的な工夫としては、商店街のメインプロムナードに木造架構の底を伸ばし、カウンターやベンチ、小上がりなど開かれた居場所を連続させ、利用者と地域住

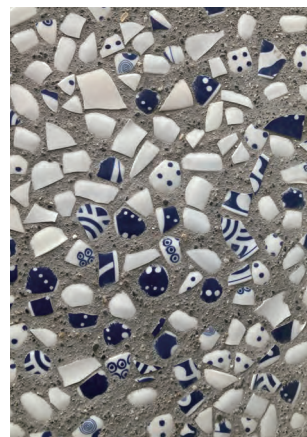


写真11・12・13. コロケスタンド

周辺の床にはカミヤト凸凹保育園で使っていた、割れた食器を再利用して埋め込んでいる。同保育園の卒業生がよく遊びに来ることもあり、懐かしんでいる。お店ではコロケ以外にビールやコーヒーなどが売られている。

民の交流の場所をつくっている。また、周辺環境との境界をあいまいにし、塀や柵のない開放感、うっすらと誰かの声が聞こえるような空気の流れや視覚的な連続性によって人との繋がりが感じられる空間となっている。都市レベルでみると、まちの軸線を土間通りによって引き込んでおり、住民の日常の動線上にある居場所となっている。

謝辞

ご協力いただきました皆様に、篤く御礼申し上げます。なお、本事例紹介原稿の執筆は、科学研究費補助金（基盤B）「ケア中心型社会の基盤となる持続的な「共在の場」とケアの関係構築に関する包括的研究（研究代表者：山田あすか）」の一環として行われました。

注釈

1) 「Baluko Laundry Place（バルコランドリープレイス）」は、株式会社OKULABが提供する、日々の「洗濯」を楽しむことを目的としたランドリーである³⁾。特徴的なサービス内容として、ランドリーでのセルフランドリー／オリジナルの洗剤と柔軟剤／クリーニング／洗濯代行／カフェ／ペット用品専用のエリア等がある³⁾。

参考文献

- 1) teco, 春日台センターセンター, <<https://teco.studio/kasugadaicentercenter>>, 2022年9月18日参照
- 2) 馬場拓也, KCC_内覧会ハンドアウト_final
- 3) OKULAB, Baluko Laundry Place, <<https://baluko.jp/>>, 2023年05月08日参照



写真 17. グループホーム内観



写真 18. 土間通り



写真 14・15・16. 小規模多機能内観